

第百七十三話 無様な自決未遂の意味するもの！

阿南陸相の割腹自殺、宇垣中将の特攻自決等、軍事・政治指導者の自決が相次ぐ中、1945(S20)年9月11日、開戦時首相であった東條大将の自決未遂事件が起きた。東條大将は米軍の徹底的な治療の甲斐もあり一命を取り止め、東京裁判でA級戦犯とされ、翌々年12月23日(当時の皇太子の誕生日)に死刑を執行された。東條大将が処刑された日、天皇は一晩中涙したと云われる。この自決未遂事件の真相は闇の中ではあるが…

1 自決未遂事件の顛末

9月10日、マ元帥は戦争犯罪人に関する指令を発した。翌11日、マスコミは、東條逮捕をスクープすべく東條宅に集まった。MPの示す逮捕状を確認した東條大将は、応接間の椅子に座り、右手に持った拳銃で自らの胸を撃つとみられる状況で発見された。午後4時17分頃。急所は外れている模様だった。東條を殉教者にするなどのマ元帥の指示で、米軍による最高レベルの手術と看護により、奇跡的に九死に一生を得た。

2 自決未遂事件に係る論争

(1) 批判や擁護論

- ・自決狂言説
- ・武人にあるまじき失態
- ・潔く15日に自決すべきだった。
- ・何故、拳銃を使用したのか
- ・死に損なうとは情けない。
- ・卑怯未練がましい所業
- ・自決せずに堂々と裁判で主張すべきを主張すべき
- ・国中挙げて東條大将に責任押し付けの傾向加速
- ・MP来宅時の自決は生を盗むに似たり
- ・醜悪
- ・使用拳銃の選択の適否
- ・家庭の身辺整理もし、周到に準備
- ・瀕死の状態で新聞記者に長口舌の遺言は茶番劇
- ・大将は、戦陣訓の公布者として死ぬべきと思っており、自決は本気
- 何れにしろ、大将の自決未遂が報じられると、東條叩きがエスカレートし、東條大将の悪者イメージが固定化した。

(2) 東條は、前々日の9日、最後の陸相であった下村定大将と長時間にわたり会談した。東條大将自決の覚悟を聞き知った陸相は東條大将を呼んだのである。陸相から陛下に御迷惑を及ぼすべきではないと諭されたと言う。

(3) 笹川良一氏の示唆

笹川氏は、正義の戦争であったことを堂々と主張することと、開戦の責任は東條大将にあり天皇にはないことを表明すべきであると示唆していた。

(4) GHQ フェラーズ准将の米内海相を通じての示唆(前第百七十二話関連)

3 無様な自決未遂事件の謎解き

名誉を重んじる東條大将の無様としか言いようのない自決未遂事件が、今一腑に落ちなかった。ある本に東條大将は明暦の頃の町奴仁佐が、奉行から“格好良い死に方をされて後に続く町奴が出たら困るので、それを防止するためにも、見苦しい死に方をしてくれ”との懇望を受けて、その通りの処刑を受けたとのエピソードを思い浮べ、自らも仁佐と同じく無様な独裁者を演じたのだろうとあった。この文を読んで、そう考えれば、全ての謎が氷解し、小生の腑にストーンと落ちた。

(参考文献「転進 瀬島龍三の「遺言」116p」)

東條大将を美化しすぎだとの非難もあろうが、そうでも考えないとあの無様さは酷すぎる。東條大将は東京裁判では熱心にメモを取り、宣誓供述書も堂々として立派で、「カミソリ東條未だ衰えず」の観があったという。東條大将はスクープゴートにされたと云えよう。

* そろそろ名誉回復すべき秋ではなかろうか！

(第百七十三話 了)